

研究ノート

INAX 滞在型創作プログラム「未来陶房」
「やきもの新感覚」シリーズ8th 陶の時間
池田晶一展

池 田 晶 一
日本福祉大学 情報社会科学部

**INAX Artist in residence Program “ Future Studio ”
“ A new sense of the ceramic ” Series 8th.
Shoichi Ikeda EXHIBITION**

Shoichi Ikeda
Faculty of Social and Information Sciences, Nihon Fukushi University

Keywords: 現代陶芸, セラミックアート, 芸術, 表現 .

1. はじめに

2000年2月10日～3月5日, INAX世界のタイル博物館(常滑)企画展示室において「やきもの新感覚」シリーズ8th 陶の時間 池田晶一展を開催した.

この展覧会は, INAXの滞在型創作プログラム「未来陶房」として1999年から開始され, 第1回目の作家として社内選考・選定された.

1999年7月よりINAX実験工房内において作品の制作を構想の段階から作り上げ, 2000年2月10日～3月5日にその成果を上記企画において発表することとなった.

このプログラムは, 日本在住のアーティストとINAXがやきものの素材の未来の可能性を試行錯誤し, 創作する滞在型ワークショップとして企画されたもので, 内容としては, 愛知県常滑市にあるINAX実験工房内で, INAXのスタッフと, やきものの新しい可能性を模索し, 実験しながらコラボレーションを行うといったものである.

今回このような機会に恵まれたことに, INAXの関

係者に感謝の意を記したい.

ここでは, 未来陶房における新しい作品制作の進め方(制作の基礎研究・制作過程・スタッフとのコラボレーションについて)と, 展覧会について述べる.

2. 制作の準備

2.1 作品制作の出発点

まず最初に新しい作品制作の入り口について述べたい.

今回のプロジェクトでは, 私自身にとってもINAXのスタッフにとっても新規の試みとして, 新しいものを作り出すという事自体が出発点であった. 新しいものと称しても実際のところ, 何をどのように作り上げてゆくのかさえ無い状態であった. 本来作品の制作においては, コンセプトがありそれに基づいて何がしら進めるべきものであるのだが, 新しいものというキーワードだけではつかみようがない.

そこで, まずきっかけを探すために制作に必要な粘土と石膏を触ることから始めた. 触覚と自分自身の感

性の中から、ものにつながる何かを探し始めることから始めたのである。

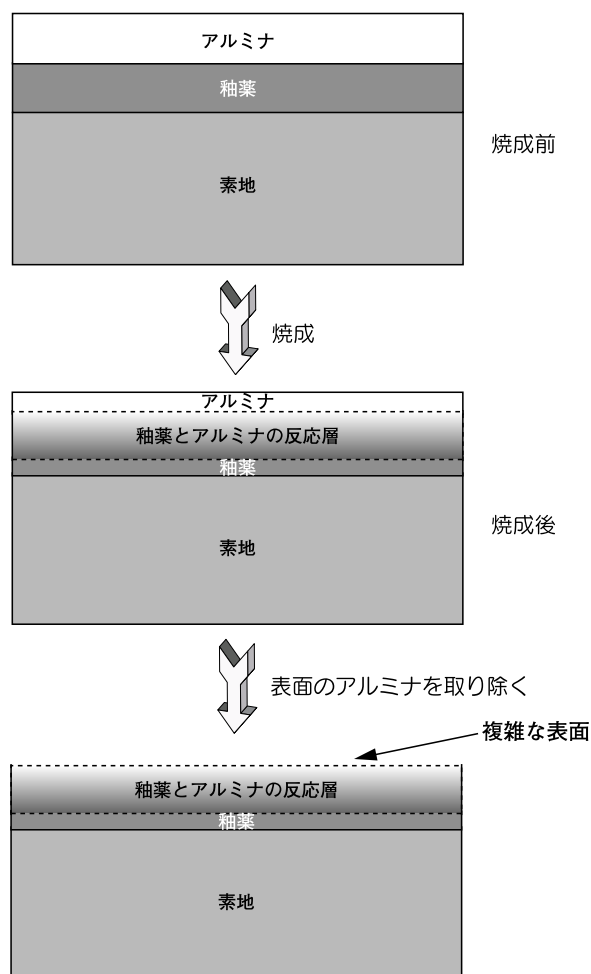
3. 技法

3.1 表面処理のテスト（釉薬）

まず最初に、今回取り上げるべき技法として表面処理の複雑さを模索することから始めた。

やきものの表情としていろいろなものが存在するが、その表面処理によって多様な表情を見せる。今回の取り組みでは、非常に深みのある錆びたような表面を作り上げたいと考えた。それはこれまで私の作り上げた造形において形状が第一の視点であったところから、新たな別の視点を見いだす事でもあった。

その技法として、釉薬の上にアルミナをかぶせるといった方法を考えた。(図1)



(図1)

釉薬とはやきものの表面を覆うガラス質の事を言うが、アルミナとは一般に、焼き物が引っ付いてしまうのを防止するために使用する。

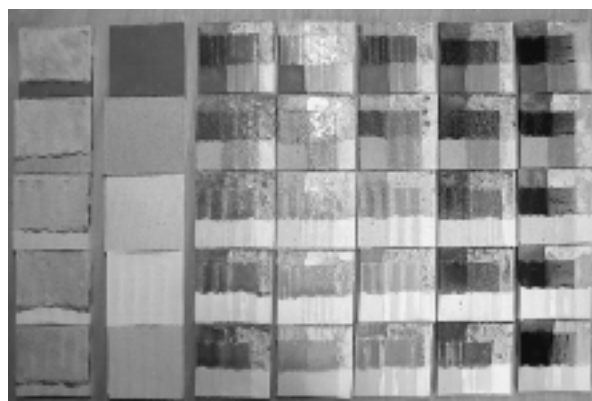
アルミナそのものは融点が高く、いわゆる焼き物を焼成する温度(1200~1300)では、溶けない性質を持つ。用途としては、釉薬の融点を上げるために用いたり、または焼き物を窯で焼成する際に、棚板(窯の中に組む棚)に陶器がくっつかないように塗布するなどに使用する。

本来、窯の焼成時には作品の上にアルミナが降ってこないように注意するものである。それは、釉薬の上にアルミナがあると通常それは傷として扱われる。しかし釉薬の上にアルミナを吹き付け焼成することで、釉薬とアルミナが窯の中で熱により溶け合い複雑な表情を醸し出すことができる。

まずは釉薬とアルミナの作用の仕方をテストピースを作成し確かめることからはじめた。(写真1)は、素地土と釉薬の種類を変えてテストしたものである。テストに用いた土は5種類で、(信楽土 水簾 陶芸用赤土・大物特殊粘土A-14・古信楽土 荒・栗田土A-38・N-23磁器 上石)である。

釉薬は5種類(織部釉・青荻釉・黄瀬戸釉・そば釉・瑠璃釉)である。

焼成温度は1250 で窯の雰囲気は酸化焼成である。



(写真1)

上記のテストから今回求めるべき色を選び出し、採用することとした。

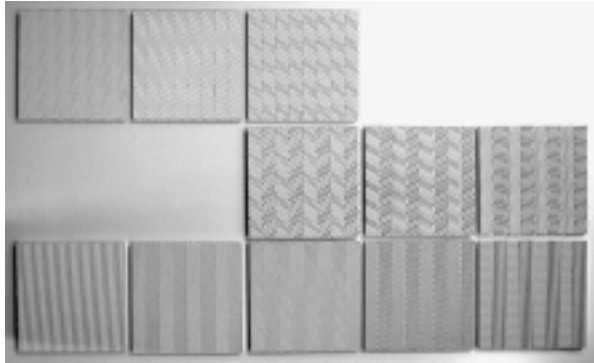
今回用いた釉薬は、織部釉・そば釉・黒釉の3種類である。黒釉は後日試験をし、採用した。

土に関しては、INAXの製品に常時使用している土で

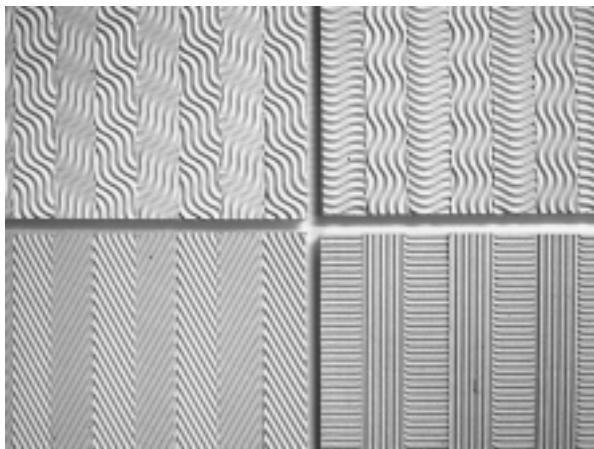
同じ効果が得られることがわかったので、それを採用することとした。

3.2 表面パターンテストサンプル

釉薬とアルミナによる表面処理と同時に、立体表面のテクスチャーのパターンのサンプルを作成した。(写真2・3)



(写真2)
右から原紙・30°・45°・60°・90°
上から、波同方向・波互い違い・ストライプ互い違いの展開。



(写真3) 写真2の一部拡大図

基本となる彫り込みパターンは、凹凸の波のレリーフの施された厚紙と直線のストライプの厚紙2種を使用した。

おのおの2cm幅で、30°・45°・60°・90°の角度でカットし、パターンを作成した。このパターンを展開するとモアレのような効果が生じ不思議な表面を作ることができる。また、波及びストライプのレリーフパターンと釉薬の相乗効果によって、より複雑な表情が期待できた。それは焼成時にレリーフの溝の部分に釉薬が

溜まり、釉薬とアルミナの厚みの差が生じるためである。今回使用した釉薬は厚みによって比較的变化を生じやすいものであった。

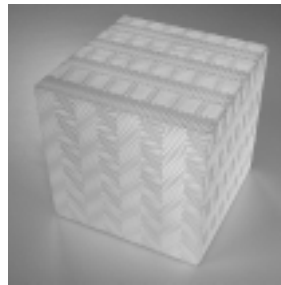
4. 作品制作

レリーフのパターンが決まった後、作品の原形を作成する。その前に、今回の釉薬及びパターンのサンプル作成を踏まえて、作品の形状を考えた。作品の基本的な形状については、表情を見せるために幾何形態をベースとしてデザインすることとした。

4.1 原形作成

原形の作成は、石膏を用いて行った。

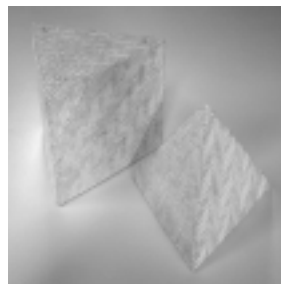
立方体・三角柱・正4面体・円柱を基に、四角柱・三角柱・四角柱の波形・三角柱の波形の8種類を作成した。(写真4・5・6・7)はその一部。



(写真4) 立方体



(写真5) 円柱



(写真6) 三角柱・正4面体



(写真7) 四角柱の波形

各形状の表面は、その形に合わせて2種類のパターンを表面に施した。形状の持つイメージとパターンとの組み合わせが表現の中で大きな意味を持ち、一見同じように見える表面に、錯視のような効果をもたらすためである。

4. 2 石膏型作成

原形を基に石膏型を作成．

4. 3 泥しょう鑄込み

石膏型を乾燥の後，泥しょう（粘土に珪酸ソーダーを混入し，クリーム状にした粘土の事．）を型の中に流し込み，泥しょう鑄込みで成形する．この時，石膏の型は中の泥しょうの水分を吸収し石膏と触れているところに粘土の膜ができる．一定時間経過後，余分の泥しょうを流し出し（排泥），離型する．（写真8・9・10）



（写真8）石膏型組み立て作業



（写真9）泥しょうの鑄込み作業



（写真10）排泥の後，石膏型から出す．

4. 4 素焼き

鑄込成形の後，乾燥し800 で素焼きをする．

4. 5 施釉（釉薬をかける）

素焼きの素地にそれぞれ織部釉・そば釉・黒釉をコンプレッサーで吹き付ける．

4. 6 アルミナ吹きつけ

釉薬の上にアルミナを水で溶いたものをコンプレッサーで吹き付ける．このときアルミナ液にはCMC（化学糊）をまぜ，定着を良くする．アルミナと水のみでは，乾燥したときにアルミナがはげ落ちてしまい，有効な効果が期待できないためである．（写真11）



（写真11）アルミナの吹きつけ

4. 7 本焼き

窯詰めの後，1250 で酸化焼成を行う．

4.8 仕上げ

窯出しをした後、余分なアルミナを取り除き、陶片で表面をこすりつける。そうすることにより幾らかの釉薬とアルミナの反応層がこそぎ落とされ、表面の表情がより複雑になる。

5. 作品の組み合わせ

5.1 ユニット構成

作品の構成については、ユニット構成（同じユニットの繰り返しによる展開）でまとめた。おおよそ、作品の最終的な形はイメージしていたが、今回の場合焼き上がったユニットによってそれを視ながら作品を組み、最終的な形にすることにした。

ユニットは各形状ごとに、緑・茶・黒の色味がありそのユニットが持っている色彩と存在感・また、表面の 패턴の組み合わせを一つ一つ確かめながら構成していった。

結果的に、12種類の組み合わせを作り出すことになった。

6. タイトルについて

タイトルについては、INAXでの制作を始めた最初の頃から考えていたが、キーワードとなったのは、風化したような表面・存在の新しさ（はじめて見るような）・懐かしさである。それは、今回の作品が土の中から掘り出したような、または何万年もの間、海中に沈んでいたような風合いを作りたいということからきている。12の形それぞれにタイトルを付けたい思いもあったが、全体をまとめて「遙かなる未来の記憶の形」とした。個々は記号的にローマ数字の ~ を用いて分類することにした。

「遙かなる未来の記憶の形」についてもう少し触れておくと、本来遙かなる太古の記憶・・としてもよいかもしれない。しかしここで、未来という言葉を持ち込むことで、「今」という時間が見えてくる。今から未来に向けての記憶の形というように表現したいと考えたのである。

7. 展示

展示については、作品個々を展示台の上に並べることとした。例えば部屋そのものを作品としてしまうようなインスタレーションも考えられたが、今回の作品

はあくまで掘り出してきた遺物のように表現をするために、あえて標本的に扱うこととした。展示台は個々の作品に合わせて大きさと高さを調整した。展示室のレイアウトは、これも整然と作品を並べた。展示台9点・壁面3点、合計12点である。

展示風景と作品写真は以下にまとめて添付資料とする。

8. コラボレーション

ここで、INAXのスタッフとのコラボレーションについて触れておく。個々の制作過程の中では記さなかったが、今回の制作のあらゆる場面に置いて作業を共にしている。

メーカーとしてのこれまでのいろいろな蓄積の中で、例えば釉薬についてこのようなことができるかどうか？成形については可能であるか？型の制作について・焼成について、とその過程、過程において協力・助言・実際の作業にご尽力をいただいた。

このプログラムの中では、ちょうどゲームでカードを出し合うような関係があった。何かに対して自分のカードを出すと、違った形でそれが返ってくる、それを見てまた次の手を考えるといったようなキャッチボールがあった。この中で、自分では思いつかなかったようなところへ導かれる思いを何度か経験した。それは自分の意図を外されるというよりも、その可能性の方に気持ちが向き、新しいものを生み出すエネルギーにもつながった様に思う。

このコラボレーションによって生まれたものは、目に見える形では作品・展覧会というものがある。しかしそれ以上にこのプロジェクトの中で行われたコミュニケーションは大きな意味を持つものではないだろうか。

9. まとめ

ここまで、作品の制作についてその経緯や制作過程・展覧会について述べてきた。研究という意味合いにおいては作品そのものを結果・成果として見ていただきたい。また、研究の意味や新規性においては今回、釉薬とアルミナのやきものの新たな表面処理技法・レリーフのパターン研究として挙げられる。総合的な意味において作品が存在しているということをここに書き留めておきたい。

また、このプロジェクトを進めて行く色々な過程で新しいものにつながるアイデアのきっかけがあった。今後のテーマとして取り上げたい幾つかの事柄がすでにある。それらは、次なる新たな展開としてつなげていこうと考えている。

10. 謝辞

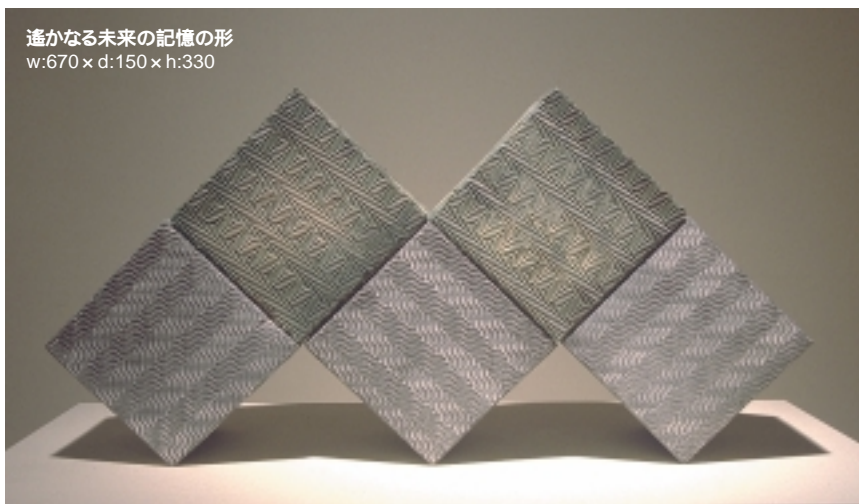
最後にこのプロジェクトに関わる方々に感謝の意を記しておきたい。INAXの企画に関わるところから、実際の作業に関わって頂いた実験陶房のスタッフの方々・INAXタイル博物館のスタッフの方々・その他関係者に心からお礼を申し上げたい。

またこのような機会に恵まれたことに、心から感謝いたすところである。

これを踏まえて、私自身の今後の展開に結びつけたい。またINAXにおいても何らか今回のプロジェクトから導き出されるものがあることを願ってやまない。

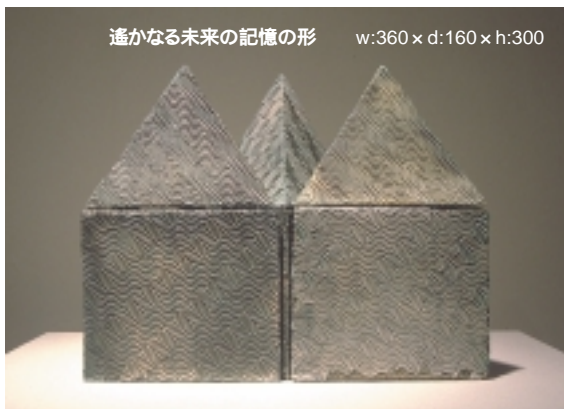


遙かなる未来の記憶の形
w:670×d:150×h:330



INAX 未来陶房プログラム
「やきもの新感覚」シリーズ 8th
陶の時間
池田晶一展
2000.2.10～3.5

遙かなる未来の記憶の形 w:360×d:160×h:300



遙かなる未来の記憶の形 w:540×d:180×h:320



